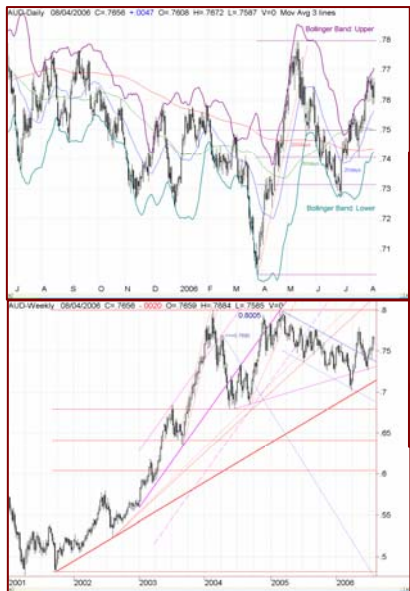


【豪ドル：先週の動きと今後の注目ポイント】

対米ドル相場：小幅反落

先週は、前週が2.0%程度上昇の後、0.3%程度の上昇となりました。前週は主要通貨の中では最も強かったものの、先週は最も弱かったこととなります。昨年末対比の上昇幅は4.3%程度となっています。また、7月の相場は、6月末対比で3.1%程度上昇となりました。NZドルに対しては、前週の3.0%程度上昇の後、先週は1.5%程度の上昇となりました（週末引値は1豪ドル=1.2250NZドル水準）、昨年末対比では14.1%程度上昇となっています。国内経済指標では、1日（火）に発表された6月建設許可件数が前月比+1.6%となり、2日（水）に発表された6月小売売上高は前月比+1.0%と、それぞれ市場予想を上回りました。

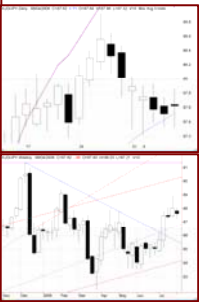


また、2日には豪州中央銀行の定例政策金利決定会合の結果が発表され、市場の大方の予想通り0.25%の利上げが実施されました。3ヶ月振りの利上げとなり、政策金利は6.0%となりました。インフレ率が政策目標上限である3%を大きく上回っていることに対応したものの、4日（金）に発表された四半期金融政策報告では、足元のインフレリスクは均衡しているとの見方を示し、一部で予想されていたような追加利上げを積極的に示唆するような内容とはなりません。市場では、依然として年内に追加利上げを実施するとの見方が優勢となっていますが、利上げによる材料出尽くしで、豪ドルの利食い売りが先行しています。テクニカル分析上では、ボリンジャーバンド（2シグマ）上限付近でもみ合いとなっており、ボリンジャーバンド

全体はほぼ値幅を維持したまま、全体に上方シフトしています。週足は、前週の強い陽線の後、下ヒゲの長い実体部分の小さい陰線となっており、この下ヒゲが潰される展開となれば、下値リスクが高まりそうです。また、右の月足（直近足は8月足で4日まで）では、



7月は強い陽線となりましたが、5月の上ヒゲを潰し切れておらず、それが達成できるかどうか今後の課題となりそうです。  
対円相場：小幅反落



先週は、前週の0.7%程度上昇の後、0.4%程度の上昇となりました。昨年末対比では+1.4%程度上昇となりました。また、7月の相場は、6月末対比で3.3%程度上昇となっています。テクニカル分析上では、20日移動平均線を下値抵抗としたもみ合いとなっており、ボリンジャーバンド（2シグマ）は上限が下降、下限が上昇しており、バンド幅は急速に縮小しています。

レンジ相場が続く可能性が高そうです。また、週足では、新しい展開を示唆するものは見受けられません。一方、右の月足（直近足は8月分まで）では、7月の陽線は、3月から5月の上ヒゲを潰す展開となっており、豪ドルが大きく下落するリスクは後退している模様です。



【ニュージーランドドル：先週の動きと今後の注目ポイント】

対米ドル相場：反発

先週は、前週の1.0%程度下落の後、1.2%程度の上昇となっています。昨年末対比の下落幅は8.6%程度に縮小しました。また、7月の相場は、6月末対比で1.7%程度の上昇となっています。重要な国内経済指標の発表はありませんでした。今週は10日（木）に第2四半期失業率の発表が予定されており、市場予想は前四半期から横ばいの3.9%となっています。テクニカル分析上では、20日および60日移動平均線と交錯する動きを続けた後、週末にはやや上昇しています。ボリンジャーバンド（2シグマ）



の値幅は急速に縮小し、値幅が狭まり過ぎていることは今後の大きな変動を示唆しているかもしれません。週足は戻り高値圏でもみ合いを表しています。また、右



の月足（直近足は8月分まで）では、7月以降の動きは、6月の大きな陰線の範囲内に留まっており、依然として下値リスクへの警戒が必要であることを示唆しています。

対円相場：反発

先週は、前週の2.3%程度下落の後、1.0%程度の上昇となりました。昨年末対比の下落幅は11.1%程度まで縮小しています。また、7月の相場は、6月末対比で1.9%程度の上昇となっています。テクニカル分析上では、概ね60日移動平均線を下限とし、20日線を上限としたもみ合いとなっています。ボリンジャーバンド（2シグマ）の値幅が縮小傾向となっていることから、レンジ相場が続く可能性が高まっている模様です。ただし、週足の重要な下値抵抗線に近い水準での「もみ合い」となっており、その後の反発力が鈍いことが依然として下値リスクが燻ることを示唆しています。これを下抜けるようであれば、下値余地は大きく拡大するかもしれません。



（石井 貢）